読者のページ

市の職員として、欠かせない視点

西区役所区政部区政推進課調査係
片岡　薫

新人研修の内容は、毎年いろいろな試みがなされているようだが、今年の研修は福祉の視点がかなり重視されていた上、実践的なものが多く、私は非常に大きな衝撃を受けたと同時に、自らの視点の幅を広げることができ、大変嬉しく思っている。

まず、半日の福祉授産所への訪問は、〝授産所〟という言葉の意味さえも知らなかった私にとり、多少大袈裟な言い方をすれば、未知の世界に足を踏み入れるといった要素を多分に含んでいた。事前に、訪問前の心構えを聞かされ、心の準備はしていたものの、自分の言動に気をつけなければなどと気を回していたこと自体、今思うと不自然に思われて仕方がない。小学校時代は養護学校が隣接していた為、時々交流会などを通じて養護学校の生徒達と一緒に遊ぶ機会に恵まれ、いろいろな状況にある人がいるのだということを自然に理解することができた。しかしそれ以来、ここ十年間はそのような機会もなく、恥ずかしいことに自分と異なる人の立場をあまり考えることなく過ごしてきてしまった。そのため、今回の南福祉授産所への訪問も、少し構えてしまったのだ。しかし、訪れてみると皆が非常に快活に作業に取り組んでいる姿がとても印象的で、心温まるものを感じた。五十八人の利用者が、縫製作業、医療品・箸のラッピング、封筒の点字打ちなど部屋に分かれて作業を行い、出来高制で給料となる。作業により、その部屋の雰囲気も異なり、丁寧に作業工程を教えてくれる部屋があるかと思えば、作業に熱中して私たちの訪れなどおかまい無しといった部屋もあった。帰宅の三十分前、皆が一堂に会して楽しそうに合唱を始めたときには、驚くやら、忙しさに追われる毎日では忘れがちな大切なものに気づかされるやら、言いようのないものを感じた。そこには、私たちの職場よりも一つの社会としてのまとまりや、やすらぎがあるように思った。だが一方で現実の問題としては、一般企業への就職が非常に困難なため、三年という作業所の期限も形だけとなっているなど、狭い世界での生活を継続しなければならない状況にあることに大変心を痛めた。また、建物の古さなどの環境面に関しても非常に納得のいかないものを感じ、状況改善への取り組みがもっと熱心になされるべきであると強く感じた。

もう一つ、新鮮な体験であったのは、赤城林間学園で受けた車椅子の介助体験であった。私は車椅子に乗ることどころか、触るのも初めてであった。たまたま介助を必要とされる、また、する機会がなかったため、車椅子を利用している方々の立場を考えたこともほとんど無かった。そのため、この研修は私にとって、介助の実践的な操作を学ぶことができただけでなく、もっと目に見えない、物事に対する視点を変化させてくれたという意味でも非常にその意義が大きかったと実感している。

このように、これらの研修を通じて得た物事の見方は、全市民にとって心地のよい街をつくっていくのが仕事である市の職員として、欠かせない視点であると痛感する。今の気持ちを忘れずに、これからの業務の中で、この視点をぜひ具体的な形で生かしていきたい。

あとがき

今回の行政課題研修のあるグループに参加した。メンバーは入市数ケ月の新人から、団塊世代のベテラン職員まで。職種は建築、土木、造園、事務、福祉事務所のケースワーカーまで多種多様、担当から課長までの構成である。設定されたテーマはあるものの、問題関心のあり様も異なり、そのテーマへの知識の蓄積度も異なる。新総合計画への反映も意図された研修であるので専門家としての立場に立てば、この際提案しておくべき中味へのこだわりも強い。議論のプロセスで、そのあたりがどう調整されたかは各グループによって異なるであろうが、どのグループも苦心したところだと思う。研究成果をみると、やはり専門的蓄積のある人たちがリーダーシップをとってまとめ上げていったようだ。中には、新総合計画にそのまま採用された提案もある。調査季報でも何回か職員の自主研究の成果について特集を組んだが、今回は、今までの報告のレベルを一歩ぬいた感がある。

研修のよいところは、仕事の枠を一歩離れて気楽な気持ちと自由な発想で議論する場が確保されることだろう。ふだんあまりつき合いのないような年齢層や職種の人たちと率直に話し合うチャンスにもなる。テーマへの関心と興味を共有化した、このような半ばインフォーマルなネットワークをもつことは、仕事に新鮮な気分をもちこみ、新しいアイデアを生み出すもとにもなる。いわば、地下水脈のような役割を果たす研修が、組織としての柔軟性と活力をもたらすのではなかろうか。今後の研修への期待大である。

さて、今号から調査季報のデザインが大幅に変わった。サイズはB5判からA4判へ。判の拡大に伴い、イラスト、写真なども多く盛り込み、より読みやすく親しみやすくなるよう工夫した。また、長い間続いた市政日誌は、前号をもって終了させて頂きました。

＜中川＞

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。企画調整室まで（電話六七一－二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。